

# フィリピンの村落共同体と

## その生活意識(その2)

——中部ルソン・タルラック州の

実態調査から——

村 上 公 敏

### V バリオでの信仰

中部ルソンの農民たちの生活意識を規定しているものとして、各種の信仰がある。

しかし、信仰といっても、キリスト教のような体系化され、教義化されたものから、もっと素朴な、土俗的な信仰、あるいは、そもそも信仰とはいえない観念みたいなものにいたるまで、様々な形態がある。さらに信仰といっても、民話、説話、迷信といったたぐいのものまで含めると、その範囲は広大なものになってくる。

そこで、ここでは、われわれの問題意識の1つであった稲作民族に固有なものとしての土着あるいは土俗信仰、もしくは民間信仰と、外来宗教としてのキリスト教信仰を中心的にとりあげ、さらに、バリオがこぞって共通に信仰するバリオの守護聖人信仰——これは土俗的なものとキリスト教的なものの混合形態であるが、しかし、その混合の仕方や、その祭儀であるバリオ・フィエスタ（日本でいう村祭り）の慣行のなかに、フィリピン独特のバリオ共同体を中心とした共同体意識がみられる——を特にとり上げることにする。

## 民間信仰

山地やミンダナオに住むいわゆる文化的少数民族といわれる人々をのぞくと、通常のフィリピン人は敬虔なキリスト教徒であることはよく知られている。したがって、外面的・一過性的観察者ならば、おそらく、平地の、とくに都市のフィリピン人はエホバを唯一・最高の神として崇めるキリスト教的精神世界だけに住んでいるものと錯覚するだろう。たしかに、精霊信仰のような土着の固有な信仰や儀礼が強力に残っている他の東南アジア諸民族にくらべると、フィリピンでは、村落の末端にいたるまで教会があり、日曜日ごとに末端の住民までこぞってミサに集うほどの、圧倒的なキリスト教の浸透度を示す国である。

しかしながら、そうしたキリスト教によって圧倒され、抑圧され、変形をこうむっているとはいえ、その基底部には別の精神世界、つまり、キリスト教がスペイン統治によってもたらされるはるか以前から、祖先伝来の慣習としてひきつがれてきた土着の固有な信心や精神世界が存在している。今、ここで信仰とはいわずに信心とのべたが、これは、日本語で信仰といった場合、どちらかといえば、ある崇高な崇拜の対象があって、儀式をともし礼拝が常時行われているようなケースを想像しがちであり、これに対し、フィリピンの土着的なそれは、英語のビリーフ、あるいはその訳語として、信仰よりは信心といった方がまだ感じとしては当をえていると思うからである。

それはともかく、以下、そうした意味での民間信仰の例を、われわれが採録したかぎりでは、未整理のままのべてみたい。

はじめにとり上げるのは、一種の自然信仰である。典型的な例としては、太陽崇拜がある。これは東の方角を吉とし、西の方角を凶とする方角観念として定着している。

とりわけ、それは、家を建てるときの階段、つまり、玄関のつけ方として住民の心を大きく支配している。バリオ・バントークやバリオ・ブロをはじ

め、いくつかのバリオで聞いたところによると、高床式家屋から地面に降りる表階段は、地面に着く所で、必ず、東方にむけられる。階段の最後が東に向けばよいと、途中で折れ曲っている階段も多い。東は何故に吉なのかと問いただしたところ、異口同音に「太陽が昇るからだ」という返答がかえってきた。西はその逆に、生命が沈む、すなわち、死を意味し、西に向いた階段の家を建てると、必ず、その一家の1人が死ぬという。それは家運の滅亡につながる。そういえば、フィリピンの国旗も太陽をシンボライズしたものとえられる。

興味ある現象だと思ったので、さらに、敷地等の都合上、どうしても階段を東に向けることができない場合どうするかと聞いてみたところ、その時には止むなく南に向けるという答であった。その理由は、南にはサウス・クルス、すなわち、南十字星があるからだという。クルス（十字架）崇拝はキリスト教徒としての信仰からくるのであろう。ただし、それは、もう自然崇拝からは縁遠くなっている。つまり、出発点では、古来からの自然崇拝がありながら、それが、キリスト教の伝来によって変形された例とみられなくもない。

自然信仰からもう少しすすんで、自然物のなかに精霊の存在を信ずることも、数多くみられた。

ルソン島の山岳地方で信仰されている精霊は、有名なアニトウ anito と呼ばれているものであるが、平野部フィリピン人のなかでも、キリスト教の導入以降、アニトウ信仰、もしくはちがった名で呼ばれる精霊信仰は完全になくなったわけではなかった。ただ、山岳地方とは祈りの形態がちがうということは、すでにふれたとおりである。

ララパックというバリオでは、集ってくれた人々がこもごもに、アニトウはスパニッシュ以降もいると答えた。たとえば、家族に病人がいるとき、夜中にテーブルの上に食物を供えて、屋敷のすみで、「ハリナカヨー デイト

ナー、ディガニトー」(食物が用意できました、悪霊はみんな集って下さい、そのかわり、病気もつれていって下さい)と唱える習慣があるという。

病気をもたらすような悪霊のことをタガログ語やビサヤ語でアスワン *aswang*, *aswang* などというが、この地方では、イロカノ人たちはアラリヤ *alalya* という言い方で呼んでいる。この霊は定まった形をしていないが、通常は動物や人間の姿をしている。顔だけだったりすることもあれば、「声はすれども姿は見えず」だったりすることもある。雨の日の道路や大きな木の下で子供が遊ぶと、この悪霊に取りつかれて病気になるといわれる。こうした話は、老人達の方がよりよく信じているが、彼らから、大人や子供達すべてに伝達され、バリオの住民達で知らぬものはないということであった。

ブロというバリオでは、次のような話を聞かせてもらった。夜中に子供が泣くと、ムルトウ *multo* というお化けがきているのであるから、家の中やまわりに米をまいて退散してもらおうというのである。

ところで、アニトウ信仰は、キリスト教の宣教師によって邪宗として排撃され、「あれは山の人だけの信仰である」といって抑えられているため、人々は多くを語りたがらなかった。

ついでながら、憑きもの *witch* についてふれておこう。この地方だけでなく、それは広くマンククラン *mangkukulam* と呼ばれ、恐れられている。このマンククランは目には見えない。アスワンは同じく人の体に憑くが、目に見えるものである点で、対照的である。バリオ・ブロのある大学卒の女教師(29才)をして、その体験を語らしめてみよう。

……私のある友人は貧しいが、それに比べて私は先生をしており、相対的に恵まれている。そのためか、友人は私をうらやましがり、そのねたみが私に乗り移って、私はひどい頭痛におそわれ、寝床をはいまわるほどであった。夫がアルブラリオ *arbulario* (一種の厄払いの祈禱師であり、医者でもある)をつれてきてくれた。そのアルブラリオは私の実の祖父であった。だが、な

ぜか、その祖父を私は非常に恐がったので、夫は何故こわいのかと私に何度もきいた。おそらく、私の中にいるマンク克蘭が、自分を追い出そうとする祖父をみて恐がったのだろうと思う。このマンク克蘭を追い出して頭痛をなおすには、火薬かマッチをすったあとの棒で頭をこすってやるとよい。マンク克蘭は火薬の臭いがきらいだから……

バリオ・ララパックでこんな話をきいた。マンク克蘭はある種の虫をもっていて、この虫に命令して特定の人物に害を与えさせる。アルブラリオは卵を割って水の中へ入れ、黄味の具合をみて病気の場所と種類を判断する。病気にかかった人の声は、マンク克蘭の声であって、人の声ではなくなる。アルブラリオは杖で病人をたたくが、病人は痛がらない。……卵を使う話はカナレム、バルバロトなどのバリオでも同様に聞かれた。別のバリオのサン・アウグスチンでの話では、アルブラリオは草や木の葉などからつくる伝統的な薬をもっているという。ところで、念のために断っておくが、通常の病気は、やはり巡回医師などによる近代医学によって治療するケースが圧倒的である。

大きな木の下は、悪霊が住むというので、子供が遊んではいけない場所であると同時に、そこで小便をしたり木を傷つけたりすることもタブー視されている。

前にもふれたが、ヴィクトリアの東部にあるバリオ・パラクパラクには、中心の広場に100年以上もあるかと思われる二本のアカシアの巨木が生えていて、この木に魅力的な美女の悪霊マリグノが宿っているといわれている。この木の枝を切ると祟りがあるというので、村人から恐れられ、だれも手をつけようとはしなかった。だから今では、30mほどの高さの巨木になって残っているのだという。アカシアをパラク palac といい、それが二本あるのでパラクパラクというバリオ名になっている。

ヴィクトリアの北部にあるバリオ・マサラサには、やはりカマチリの古木

がある。老人たちが信じているところによると、その木にも悪霊が宿っていて、幹のところについている2個の目玉から火焰が吹き出していて、人がその木の下へいくと、病気になるという。この話をしてくれたマサラサの51才になるバリオ・カピタンは、自分も木の下へいったが何事も起らなかったの  
でその話を信じていないとのべていた。

巨木のほか、小高い丘、もしくは土が高くなっている場所にも精霊が住む、ということが老人を中心にかなり信じられている。人によってはその精霊は小人<sup>こびと</sup>であると説明する。その場所に小便をしたり、足をふみ入れたりすると、バチがあたるという。もし、どうしてもそこを通りこさねばならないとしたら、カヨ カヨ kayo-kayo（お許し下さい）といわなければならない。

家の敷地内には、特別に守り神などがいたり、それを祀ったりする風習はないが、それでも、やはり、小人<sup>こびと</sup>の精がいて、たとえば窓などから熱い水を捨てたりすると、バチがあたって一時間後に子供に腫瘍ができるとされている。だからこのように精霊がいやがるものを捨てる時には、やはり、カヨ カヨといわなければならない。腫瘍ができたなら水をお供えして、その水を患部につけるとなるとされている。

ついでながら、必ずしも精霊信仰とは関係があるとはいえないいくつかの迷信やタブーのたぐいをのべておこう。

妊婦がバリムビン balimbing という果物を食べると三ツ口の子が生れる。というのは、その果物は端の形が三ツ口のようにになっているからである。

同じく、妊婦が人形をだいたりすることが好きな場合、生れてくる子に手がなかったり、足がなかったりすることがある。

また、同じく、妊婦が桑の実を食べると黒い子供が生れる。——黒い皮膚を嫌悪する観念が古くからあることについて、その根拠ははっきりしなかったが、おそらくは、スペイン統治以降、白人の優越性の観念が浸透するにつれて、倍加されているのではなかろうか。少しでも皮膚が白くなりたいとい

う願望や、スペイン人との混血、つまりメスティーソ(男)やメスティーサ(女)が象徴する社会的・経済的地位の高さにたいするあこがれなどは、今日でも、一般の人々の間に広くみられる現象である。

キリスト教の浸透とともに、キリスト教風に変形された精霊信仰もみられる。ヴィクトリアの中央からやや東にあるバリオ・クルスは、かつて、大きな椰子の木がクルス cruz(十字架)の形になって生えていたことから、その名がきていることはすでにのべたが、老人達の間で語り伝えられている話によると、ある人がその木を切って棒をつくり、喧嘩の道具に使ったため、バチがあたって死んでしまったという。これを語ってくれた人は、木の精についてはふれず、それを切った人が死んだいわれについても十分は理解していなかったが、巨木にいと信じられている木の精がクルスに変っただけで、他のバリオで聞いた巨木の崇りの話とあまりにも似かよっていることからみると、やはり、キリスト教的に変形した木の精への信仰といえなくもない。

死者の霊の存在は信じられている。ただし、ヒンズーや仏教の輪廻の思想や死生観はみられなかった。魂は死んだのち、肉体から離れて天国にいくと簡単に答える村人たちが多かった。しかし、死者の霊や祖霊は、時々、姿を見せることもある。子供が病気をしたときなど、生前によくつくしてやらなかった人の霊が、うかばれずに、その子にとりついているのだと信じられる場合もある。そうしたときは、にわとりや豚の肉の部分だけをドウラン du-lang (低いが上等の食卓) にのせて、お祈りをする。

一般に、霊に対して食物をお供えするというこうした風習をアタン atang といって、フィリピンの田舎では、広くみられるものである。そのお供えは、家人があとで食べる。

祖霊がでてきたついでに、祖先崇拝はどうなっているかをみてみよう。

北部のバリオ・マンゴラゴの例でみるならば、共同の墓は隣のバリオ・カリブンガンにあって、葬式の時以外では、毎年、11月1日のキリスト教の

先祖まつりの日、いわゆる万聖節 (all saint's day) に、全員がろうそくを  
ともして墓まいりをし、食物などを供えて夜通し祈る。翌日には、行進して  
教会に行く。

ところで、この祖先を祀る風習は、日本におけるそれとはどこかで違いが  
あるような気がしてならなかった。そのちがいは、前にのべた仏教などの死  
生観とキリスト教のそれとのちがいや、あるいは、そこからくる儀式のちが  
いという点にだけあるのではなさそうである。つまり、日本の祖先崇拜は、  
多分に「家」観念や、家族制度に結びついている面があるのにたいして、フ  
ィリピンのそれは、家の独立性・排他性が少なく、家がバリオとか、親族の  
一部としてくみこまれているせいか、むしろ、バリオ全体の祖先、あるいは、  
親族集団全体の祖先にたいする崇拜であるということである。上記のマンゴ  
ラゴの例にもあるとおり、バリオ全員がそろって祖先の祀りのために行進す  
るというのは、上にのべたことを裏書きする事実といえないだろうか。

いづれにせよ、日本ではみられない風習である。

バントークというバリオの人々の墓は、ヴィクトリア町中心部より少し南  
の役場の前にある町の共同墓地にあった。このバントークには、昔は小高い  
丘 (イロカノ語でバントークという) があって、人々はそこに住んでいた。  
しかし、付近のカラン沼から水があふれでてきて、土を流し続け、今では、  
すっかり、低地になり、毎年のように雨期になるとバリオ中が浸水するまで  
になっている。そうであるだけに、バリオ創設期へのあこがれと、開拓者で  
ある祖先への崇拜は強い所であった。ある一人のバリオ・カウンスルマンは、  
自分は迷信のたぐいは何も信じないが、古い時代に土地が高くて、そこに森  
があり、バリオがあった良き時代の物語だけは信じていると語った。つい  
でながら、ここのバリオの祖先である開拓者達 (バリオ・カピタンの祖父もそ  
の一人) は、イロコスやタガログから集った人々である。いわゆる複数の言  
語族によって合成されたものであり、それは同時に、複数の親族集団の合成



でもあったわけである。それが、共同の開拓とその時代の物語をもち、それを後世に伝えることによって、現在の住民は、共同で開拓者達を尊敬し、ひるがえって、それが現在のバリオへの共同愛着につながっているのである。

最後に、アポ apo という尊称用語のことについてふれておこう。apoは、発音の仕方からみて2つの使われ方がある。

第1は、apó で、o にアクセントがあるが、その o は声門閉鎖音である。だから聞く人によっては a の方にアクセントがあるように聞こえ、o の方は短かく切れる。この apó は、もともと、一族の長老、つまり族長を意味した。だから、バリオの創設者などにはうってつけの尊称であろう。現在では、宗教上の使用法としてイエスにつけられる場合（アポ・ジェス＝イエス様）、対自然の使用法として太陽につけられる場合（アポ・イニ＝お日様）、人間関係や社会関係での尊称として大統領などに使われる場合（アポ・プレジデンテ＝大統領様）等々がある。だから、たとえば、ダバオ郊外のアポ山（日本風にいうと御岳さん）のように、山に対して使われたり、領主に対して使われたり、孫から祖父を呼ぶときなどに使われたりする。

第二は、apò である。これは一般的に po という音節に強いアクセントがある発音であるため、聞いていても、はっきりと o にアクセントがあることがわかる。タガログ語などでは、この言葉は孫を意味する。だから、前の apó とまるきり反対語となる。ただし、イロカノ語では、apò は祖父とか、権威あるもの、たとえば主人などに対して使われる。

いろいろと理屈をのべたてたが、ヴィクトリア地区では、イロカノ人が多いために、apo といえは、ともかく、尊敬、崇拝の対称にたいする尊称として使われており、その使われ方をみるときに、われわれは、彼らの信仰、信心、崇拝の対称が奈辺にあるかを推察することができるというわけである。

### キリスト教信仰

ヴィクトリア地区の住民は、特別の無神論者でなければ、例外なしに、ま

ずはキリスト教徒であるといってもよいであろう。それほどまでに、キリスト教の浸透度は、何度もくりかえすことになるが、圧倒的だといえる。

いくつかの外形的にあらわれている例でそれを説明してみよう。

まず、教会であるが、ヴィクトリア町の中心部に、壮麗な2つの教会があるのをはじめ、各バリオにも1つないし、2つの教会がある。各バリオの教会は、すでにのべたように、その多くがなんの変哲もない数メートル四方の小さな木造の建物である。ヴィクトリア中心部には二つの教会があり、バリオによっては同じく2つの教会があると書いたが、その理由は、カソリック教徒ばかりでなく、少数ながらプロテスタント系の住民がいるからである。

教会は、ヴィクトリア町でもそうだが、各バリオでも、その中心部、つまり、プラザに隣り合って位置している。つまり、教会は、住民の精神生活の要であるばかりか、公共の社会的生活においても中心である。そこは、キリスト教徒としてのミサが行われる場所であるばかりではなく、プラザも含めて、各種の集会、祭り、その他の社会的行事が行なわれる場所でもある。

住民達は、復活祭、万聖節、クリスマスといったキリスト教の年中行事の時はもちろんのこと、毎日曜日の朝、教会にでかけてミサを行なう。

また、誕生、洗礼、結婚、葬式といった通過儀礼にかんしては、その儀式の大枠はキリスト教式に行なわれる。

各家庭には、玄関である階段を昇って入った最初の部屋に、イエスカマリアの像、もしくは画像が、必ずといって良い程、かざってある。その部屋は客人をもてなす応接間であり、かつ、日本風にいえば、床の間のような、最も大事な部屋でもあり、また仏間のような礼拝所でもある。

マニラを訪れる観光客ならばすぐ目につくところの、ジープを改造したジープニーという乗合自動車には、これまた、必ずといってよいほど、イエス・キリストの画か、像がかざってある。ここ、農村地帯のヴィクトリア地区のジープニーも同じである。もっと小さな、バイク・モーターを改造して三

輪にした輪タクであるトライシクルにも、そのかざりがある。そればかりか役場、学校といった公共の建物、仕事場などにも、やはり、イエスやマリヤの像・画などがかざってある。

こうした輸送機関を利用して道路を走っている場合、もしも、教会の前を通過するならば、乗客の何人かは、車が丁度教会の正面にきたところに、胸の前で十字を切る。

人間の名前、つまり子供が生れたときにつける名称も、その多くはスペイン風のクリスチャン・ネームである。例へば、男ならアントニオ、ホセ、ペドロ、ロメオ、ハシント、カルロス、フランシスコ等々。女なら、イメルダ、ホセピーナ、ロリータ、エリザベート、クリスティーナ等々。

どのバリオでもそうであったが、われわれが執拗にエホバ以外の神のことを聞きだそうとしても、人々は、エホバが唯一、絶対の神であるとして、われわれの質問をむしろいぶかったくらいである。もちろん、彼等は、前にみたように、神以外の精霊の存在は認めていたし、それを信じもしていた。しかし、日本でのように、あるいはヒンズー教のように、八百万の神々の存在とそれへの信仰は断固として否定した。稲の神、土地の神、水の湧く所にいる神、かまどの神、巨木や森の神はいない。そのかわりに、精霊が土地や木などにいることはすでにのべたとおりである。

人々は、神の下にある平等な個人という観念を、理性的にはひたすら信じているといってもよい。それは、あたかも、ヨーロッパ中世において、人々が神と直面するときには普遍的世界における平等な1個人でありながら、現実の社会関係のなかでは、1個人のロイヤルティが村落共同体や地域や都市や領主や国王や世俗的側面としての教会にむけられていた事情をほうふつとさせる。フィリピン農民の現実のロイヤルティは、家族であり、親族集団であり、バリオであり、言語族であり、世俗的権威である。現実がそうであるからこそ、キリスト教が普遍的宗教として強力に、権威的に機能しているに

もかわらず、その内部では、基底部において、土着的な固有の精神世界が機能しているともいえる。

したがって、ここでの問題は、キリスト教がいかに強く浸透しているかということよりも、それが、固有の土着的なものといかに結合しているかということ、その場合、土着的なものを変形させながら、同時に、キリスト教自体の変形をもうけざるをえないこと、そうでなければ、キリスト教が、東洋の1国、フィリピンの地に定着し、受容されることがおそらく不可能であったらうということ、である。

キリスト教信仰が土着信仰をいかに変形させているかの若干の例は、すでにみたとおりである。したがって、ここでは、似たような例をとり上げるにしろ、キリスト教自体の変形という側面から、土着的なものとの結合形態の例をいくつかみることにしよう。

先程、誕生、洗礼、結婚、葬式といった通過儀礼の場合は、儀式の大枠はキリスト教式に行われると書いた。しかし、内容をよくみていくと、キリスト教式は、やはり、大枠としての形式であって、実質的には、土着的価値が優先していることがわかる。

例えば、誕生である。バリオ・バルバロトでの話では、出産は、通常、ヒーロット hilot といわれる助産婦が家にきて行なう。安産のために、たまに God help me! と祈ることもあるが、大方はこの助産婦まかせである。特別なお祈りはしない。そのかわりに助産婦は土着的な方法でのお呪い<sup>まじな</sup>をいくつか行なう。これは、中部ルソンのヴィクトリアとちがって、ビサヤのボホール島出身の助産婦から、聞いた話であるが、竹の刀でヘソの緒を切る。同じく、アンティン=アンティン anting-anting と呼ばれる自分独特の製造法によるお守りをつくって、妊婦の腹の上におく。月蝕の夜は、暗いので、妊婦は外へ出てはならない。アスワンがとり憑くかも知れないからである。アスワンにとり憑かれると難産になる。難産のときは、花を助産婦が妊婦に投げ

つけるとよいという。切ったヘソの緒は、家の中の屋根からつるしておく、子供がヘソの緒でいつまでも家につなぎとめられて、家とともに生活をつづけるという縁起になる。

ヴィクトリアでは出産をめぐるこうした土着的方法について、多くを聞くことができなかったが、ほとんど出産は助産婦にたよっているということからみて、おそらくは、ボホールほどではないにせよ、土着的方法やそれをめぐる意識が残存していると思われる。ということは、お産の苦しみのときに発する *God help me!* の *god* は、実体は土着の神であって、原始キリスト教のあの神、エホバではない。フィリピンの神話が示すところでは、古代には天地創造の神を含む様々な神がいたわけである。ただ、それらの神を、唯一の神エホバという呼称に理性の上ですげかえたにすぎない。

誕生のあと、カピット・バハイの人達を呼んでお祝いをする。つまり、最も緊密な地縁的共同体の人々に、構成員が1人増えたことを確認してもらう。

結婚式については、詳しく次節でのべることにするが、ここであらかじめ指摘しておく必要があることは、式は教会で行なわれ、キリスト教風の儀式にのっとってなされるにもかかわらず、それは、あくまで形式であって、実際には、式の前夜のダンス・パーティと式のあとの祝賀パーティにおける親戚、友人、知人、カピット・バハイによるところの、新夫婦の門出に対する相互扶助の様々な慣行の方が重要であるということである。それは、彼等の結婚観や望ましい相手（これも後述）にかんする意識のなかにもはっきりとあらわれている。

葬式についても同様に、形式はキリスト教的で、内容は土着である。死体を納める柩や、それを運ぶ葬列、墓はすべてキリスト教風であり、すでにのべたように、死生観もキリスト教風である。だが、日本でいうところのお通夜、初7日、49日、1回忌にあたるようなしきたりと、その時に、それぞれ親戚、友人、カピット・バハイの集いがある点は土着的である。死後、2～

3日、いわゆる通夜があって上記の人々を呼び、埋葬がなされる。初7日にあたるのはシャムナ・ガビ *siyamna gabi* (9夜) といって、家族だけで毎日お祈りをし、9日目にまた、上記の人々が集る。49日にあたるのは、40日目であって、また、上記の人々が集る。忌中にあたるのは、最初の1年間で、黒い服か、黒いバッジをつけるしきたりである。埋葬後、5年たって、墓を掘りおえす風習も残っているところがあるようである。

通過儀礼とは別に、「農耕生活とその慣習」のところでもふれた雨乞いの仕方は、西欧式キリスト教の東洋化の例として考えられそうな風習だといえる。雨乞いは、夕方、道路をたいまつや、ろうそくをともしながら行進する方法で行われる。人々は、ヴァージン・マリアの名をとえ、「雨を降らせて下さい」という呪文を口ずさみながら行進する。雨が降ったら、教会でミサを行なう。しかし、行進では、バリオの氏神様ともいうべき、守護聖人の像が主役である。人々は、その像をもちだしてきて、肩にかわるがわるかついで行進する。実は氏神であるものが、キリスト教風の守護聖人になっているのだが、逆に考えると、氏神の助けをかりて、キリスト教の神もまた存在しうるのである。

守護聖人という呼称は、たしかにキリスト教的であり、ヨーロッパ社会でもまた、守護聖人は存在する。だが、フィリピンの守護聖人とはどういう人であるかをさぐるとき、それは、後にみるように、きわめてフィリピン的であることがわかる。

いずれにせよ、スペインがキリスト教をもちこむとき、宣教師たちは、土着の神々を生かしながら、それをキリスト教の神につなぐことによって、キリスト教をスムーズにフィリピン社会に浸透させる上で、並々ならぬ努力を払ったにちがいない。キリスト教にかぎらず、世界宗教と名がつくものは、本来、他の異なる文化的伝統をもつ社会に受容されるべき柔軟性をそなえているものである。しかしながら、農村のような基底社会にあっては、そうし

た外来文化や意識は、たとえ、受容されたにしても、たえず、表層意識にとどまらざるをえないのにたいし、農民の土着性に規定された深層意識は、たえず機能しつづける。

フィリピンのキリスト教布教者達のこうした土着化の努力の歴史もまた、今後、大いに究明される必要があろう。スペイン統治の初期にはじまり、ナショナリズムが高揚した19世紀末のフィリピン革命期、そして、戒厳令直前において、農村の貧困や農民の独自の価値意識、救済意識に適應できなくなった旧来のキリスト教を脱皮して、農村把握にのり出したキリスト教左派、そして、戒厳令下で多少とも農地改革が進められてきている今日、等々、歴史的に解明されるべき転回点におけるキリスト教のありようが、大きな関心となって浮かび上がってくるのである。

#### 守護聖人とバリオ・フィエスタ

バリオの人々が、自分のバリオの創設にまつわる物語を信じ、それを語りつたえることによって、祖先を崇拜し、同時にバリオ構成員の結束をはかっているということは、すでにのべた。そうした自分たちのバリオ共同体の存在理由、もしくは、結合と繁栄のための共通のシンボルとして、彼等は、それぞれバリオ毎に守護聖人 *patron saint* をもち、かつ信仰している。

守護聖人として崇められる人はどういう人かという点、やはり、何らかの意味で、バリオの創設に関連し、その運命を左右していると信じられている想像上の人物である場合が多い。つまり、バリオ民にとっては、もともと、一種の運命共同体としてスタートしたバリオの、安全と繁栄を保障し、守護してくれるにふさわしいと信じられるにたる何らかの根拠をもった神であったわけである。その守護神がスペインとキリスト教の支配下で聖人にかえさせられた。

だから、この守護聖人の名前は、たとえば、サン・フェルナンドとか、サン・ニコラスのように、スペイン風のクリスチャン・ネームでつけられている

る。そして、バリオによっては、その名前が、バリオ名になったりする。つまり、フィリピンの守護聖人信仰は、実質的にはキリスト教風に変形されたバリオの守護神信仰である。

そのためか、バリオの住民にとって、信仰の対象としての守護聖人の地位はきわめて高い。エホバは、あらゆる自然と人間にとっての創造神であるが、それは普遍的、かつ、抽象的存在であり、バリオ民にとっては、そのバリオだけに関係し、バリオを守護してくれる守護聖人の方が、具体的な関係ととり結ぶ可能性が強い。すでに、雨乞いの風習でこのことを説明した。

教会にあっては、イエス・キリストやマリアの像と同じく、守護聖人の像も安置されている。ミンダナオのダバオ近郊のあるバリオで、守護聖人の像が教会の入口に門番風に祀られているのを見たことがあるが、ここ、中部ルソン、ヴィクトリア地区では、教会の内部であった。

各家庭にも、守護聖人の像が、玄関を入ったすぐの客間に、イエスやマリアと並んでかざられている。

ということは、エホバ、イエス、マリアにつぐ程に、信仰対象としての守護聖人の地位が高いことを示しているのではないだろうか。問題は、その理由であるが、やはり、それだけ、バリオの存在そのものが具体的に自分達の現在の生活の保証であることを信じているからであろう。構成員の大部分が親籍関係であるような血縁的共同体として、かつ、共同で土地を開拓し住みついたという地縁的共同体としてスタートしたバリオにとっては、守護聖人は、日本の氏神様と同じ、あるいは、それ以上の崇拜の対象たりうるわけである。

もう一つ、守護聖人の信仰の地位の高さは、次にのべるところの、守護聖人の誕生日などに行なわれるバリオ・フィエスタ *barrio fiesta* (バリオ祭り) が、住民の年中行事のなかで最大の催し物となっていることから理解できる。リッチョン[litson と呼ばれる小ブタの丸焼きは、彼等の最高の御馳走で



あるが、それは、復活祭や、クリスマスとならんで、このバリオ祭りの時にしか、通常は食べられない位だという。催し物の数や賑わい、集る人の多さという点では、むしろ、復活祭やクリスマス以上の、最大の行事だといってよい。

ともかくも、この守護聖人信仰のなかに、キリスト教信仰と土着信仰という異質なものの典型的な結合形態をみてとることができるし、また、同時にバリオ住民の伝統的な共同体意識の最大の象徴をみてとることもできるといえる。

さて、バリオ祭りであるが、これは、日本の農村のように、村の鎮守の神様と稲作儀礼がかたく結合してはいないので、必ずしも、収穫の秋に行なわれるとはかぎらない。収穫時には、IVでみたように、せいぜい、作業を共にした仲間、いわゆる、カピット・バハイやプロクの人達と小羊などをつぶして会食する程度である。それは、相互扶助・協力の風習としての性格をもっている。だが、バリオ祭りは、バリオ毎に日がきめられている。というのは、守護聖人の誕生日だからであろう。入手した1974年6月のカレンダーをみると、日付の下に、毎日のように守護聖人の名前が2人ずつ書かれていた。つまりその日が、その名の聖人の誕生日である。6月だけではない。1年中、毎日のように、カレンダーには、聖人の名前が書きこまれている。だから、一年中フィリピンのどこかで、バリオ・フィエスタが行なわれているといってもさしつかえない。

もっとも、バリオ祭りをやらない所もあった。サンタ・カナレムがそうである。ここは以前には祭りを行なっていたが、費用がかかりすぎるというので中止になっている。だから、このバリオの人々は隣近所のバリオ祭りのときに出かけて行くのだそうである。

カナレムの例でもわかるように、バリオ祭りには、それほど多くの費用がかけられている。一戸の家計でみると、年収の5分の1は使うという話もあったほどである。晴着は、金がかかるからというので、人々は普段着のままであるが、費用をかけるのは御馳走である。各家庭では、先述した小豚の丸

焼きのほか、山羊をころし、普段はあまり飲まないココナツ、砂糖キビなどでつくった地酒を出す。一年でめったに食べたり、飲んだりしないものが出るばかりではない。料理の数が豊富である。さらに、大勢の人にふるまうので量も多い。肉は魚も含めて、あらゆる種類のものが出るし、野菜のたぐいもそうである。ついでながらのべておくと、フィリピンでは普通の犬の肉もたべる。たべないのはカラバウ（水牛）で、これは法律で屠殺が禁じられている。というのは、農耕にとって必要不可欠な財産であり、それがため、フィリピンの1つのシンボルともなっているからである。

この御馳走を誰にふるまうかといえば、親籍、友人、知人、バリオ内の隣人、近隣のバリオからの訪問客、役人、通りすがりの旅人と、その範囲は広い。ともかく、見知らぬ人も含めて、誰に対してもふるまわれる。

だが、何といっても、各家庭での御馳走と同時に、バリオ祭りの行事の中心は、プラザと教会を中心としてくり広げられる催し物であろう。

教会や、各家庭にある守護聖人の像の前には、ろうそくがともされ、お供えものがおかれる。

プラザの周囲には、アイスクリームやアイスキャンデー売りをはじめ、日本の縁日のように、様々な売店がたちならぶ。バリオにある小学校がこの日は休日になるので、子供達が大勢、この売店に群がる。

広場では、バスケット・ボール大会が開かれる。バスケット・ボールは、フィリピンの国技といえるくらいに普及し、奨励されている。あたかも、日本では、神社への奉納のため、国技の相撲大会が開かれるのに似ている。このほか、のど自慢大会なども開かれる。ときには、どさ回りの劇団などの小屋もかけられる。われわれが調査を行なった1974年には、マニラでミス・ユニバース・コンテストが開かれたせいかどうかはわからないが、ミンダナオのダバオ近郊のバリオでは、バリオ祭りの行事として、ミス・バリオ・コンテストが開かれていた。入賞者を表彰するのは、ダバオ副市長であった。

サンタ・カナレムの例にもあったように、費用がかかりすぎるという理由で、中止になったり、あるいは簡素化されるという傾向は、あるいは今後、増大するかも知れない。しかし、この祭りが、日本流にいうと、それこそ、「村は総出の大祭り」であるだけに、バリオ民の日常の物的・精神的生活のすべてを投入した慣行として、生命を保ちつづけるであろうし、共同体としてのバリオの発展とともに個々人の生活もまた存在するという、共同体意識の存続とともに存続するであろう。

## VI キンシップと人間関係

今まで、たびたび、指摘してきたように、中部ルソン農村における人間関係では、親族や家族といった血縁関係、いわゆるキンシップの存在と機能が重要な役割を演じていることが目立っていた。末端の行政単位であり、かつ自然村としての性格をもつ、バリオにあっては、一つには、こうしたキンシップを基礎とする共同体原理がいまもなお、生命力をもっている。

したがって、以下、血縁関係を基軸としたバリオの人間関係のさまざまな形を、われわれの採録したケースにそくしてのべることにしよう。

なお、そのさい、バリオが共同体として機能しているもう1つの側面としての、地縁関係についてもふれることにする。

血縁関係については、2種類のものを識別することができる。1つは、実際に血のつながりがあるところの、家族、親籍等、いわゆる真正血縁関係 *maghamag-anak* であり、他の1つは、血のつながりがなくても、それと同じような関係にある間柄、つまり、擬似的血縁関係 *magkasam-bahay* (本来は同一の家に住む関係という意味) である。フィリピン社会においては、後者も、前者と同じく、きわめて重要な人間関係のあり方の特徴を示していると思われるのでふれることにしよう。

### 真正血縁関係

こういう言い方が適当であるかどうかはわからないが、実際に血のつながりがある血縁関係を仮に真正血縁関係と呼ぶことにしておこう。

まず家族からはじめよう。ヴィクトリア地区の家族構成は、われわれがサンプリングをしたインフォーマントの家族にかぎってみると、夫婦とその子供から成る核家族が圧倒的であった。子供の数は、多い家で10人位、少ない家で5人位、平均は6～7人位であった。時たま、祖父母も同居しているケースもあったが、それはむしろ、例外であった。

しかし、ここでいう核家族は、近代の産業化社会における核家族の概念とは、いくつかの点で、いちじるしく異っているといえる。

その1つは、子供が平均6～7人という数字である。欧米や日本の核家族は、せいぜい3～4人位までである。欧米や日本の場合、家族計画の考え方とそれにもなう技術が発達し、普及しているということは、たしかにそのちがいをもたらす一つの根拠であるが、それが決定的な理由とはいえないのは、「子供は多い方がよい」と聞く人ごとに答えるようなフィリピン農民の独特な考え方があるからである。

われわれの常識では、貧困であれば子供が多いのは困ると考えるのが普通であるが、中部ルソンでは、貧困であればこそ、なおさら、子供が多い方がよいようである。その理由は、家族というのが、生活上、困ったときの最大の頼りであるということらしい。バリオ・マルイドのヴィセンテ・ガルシアというバリオ・カピタンの話では、災害対策といった大きな問題は、政府に依存するしか方法がないが、それ以外はすべて自分の家族の皆んなの力でなんとか解決をはかる以外にはないということである。国家、政府、地方自治体による社会保障制度が、われわれの場合、最後の生活保障の手段として、ある程度の可能性が与えられているのにたいして、彼らには、それが無い。いきおい、彼等は自前の家族員による相互扶助に最大の依存をせざるをえない。

バリオ・カリブングンのカピタンの話では、困った問題が生じたら、まず誰に相談するかとの問いに対し、妻に最初に相談する、それでも解決がつかない場合は母に相談するという回答があった。

子供の方はどうかというと、これについては、われわれがヴィクトリアの公立高校で行なったアンケート調査の結果がより良き回答を与えてくれる。アンケートは、高校1年の男子24名、女子32名（いずれも年令11才～14才）、および、4年の男子18名、女子31名（いずれも年令15～18才）にたいして行なわれた。そのなかの1つの質問事項に、将来どういう人物になりたいかという問いがあった。どういう人物かというのは、特別に職業上の希望を聞いているのではなく、タイプを聞いているものであった。回答として出てきたのは、驚くほど類型的な内容である。たとえば、「家族を扶け、役に立つ」人間とか、「弟妹の教育費を出して親の負担を軽くする」人間とか、「両親と家族にサービスできる」人間とかになりたいと回答したのが合計して約31名、すなわち3割におよんだ。その他、「コミュニティの進歩に寄与できる」人間とか、「貧しい人に必要な」人間になりたいと答えた者も含めると半数にのぼる。質問の仕方は、あらかじめ、いくつかの回答を用意してそれを選択させるという方法をとらなくて、自由に書かせたのであったが、これだけ、類型的な回答、しかも、家族やコミュニティの貧困を解決するのに役立ちたいという回答が多かったのは、まさしく、一種の驚きであった。

もう一つ、同じ例でわれわれを驚かしたのは、24才になる看護婦をしている未婚の女性にインタビューをしたときのことである。少しお金がたまったらまず第1に何に使いたいかと聞いたところ、日本の若者のように、車とか、海外旅行とかの答えとはまったく性質の異なる次のような回答であった。「弟達の教育費に使います。教育は、生活を向上させるのに役立つからです」。彼女は10人の子供のうち四番目で、彼女の次からは、まだすべて、学校にいて、親の負担が相当なものだと思われた。親の負担を軽くするために

協力するという気持と、教育を弟達につけてやって、一家の生活向上に役立ちたいという気持が、この回答から十二分に読みとれたわけである。

都会では、親子の世代間のずれは、フィリピンでも、戦後、大きくなっているという統計や研究論文もあるが、ここ、農村にあっては、それ程、世代の断絶が感じられないのは、親も子も、家族というあらゆる価値の中心を軸に、相互扶助・協力の精神をまだ強く保っているからだと思われる。

家庭内における役割・地位についても、多くの質問や観察を行なった。やはり、女は、日本と同じように、食事などを作る人、男は一般にそれを食べる人、という分担となっている。掃除も一般に女性がやる。しかし、男は、朝早く、4時ごろから、一日中、農事、その他の仕事に追われる。

一般に、東南アジア社会では、女性の地位が相対的に高いといわれているが、ここ、フィリピンでもそうであった。家計をにぎっているのは妻の方である。そればかりか、相続が男女平等の均分相続になっていることや、夫婦それぞれの財産権があることも、女性の地位の相対的高さと関係があるだろう。この財産を掌握し、それを、家督相続として男の長子に代々引きつがせていた戦前の日本のような家族制度はないし、そうした「家」観念もない。

こうした女性の地位の高さは、他の東南アジアの国々にもみられる双系家族と、それを特徴とする親族構造に根拠があるとみられる。しかし、ここではまず、双系家族や親族構造の説明を一般的に論ずるよりも、ここヴィクトリアにおける結婚（1組の男女が血縁関係に入る行為であると同時に、2つの家族が親族となり、男の方の親族と女の方の親族間が血縁的に結ばれる行為でもある）の行なわれ方についてのべておこう。

結婚年令はどうかというと、以前は14才ぐらいで結婚する例がかなりみられたが、現在は次第に遅くなっているという。法律上では、18才で親の許可なしに結婚できるようになる。慣習としても、女の子が18才になると、カピット・バハイの人々を呼んでご馳走をし、あらためて紹介するという。つま

り、パーティーなどに1人ででかけることのできる年齢になりました、という意味が含まれているそうである。ただ、このことを話してくれたバリオ・カブルアンのカピタンの意見では、女21才、男25才が結婚するのに適当な年齢だということであった。これは政府の「新しい社会」計画が奨励するところでもある。

相手をさがすのは、かつては両親であったが、現在は、ほとんど本人まかせで、既にのべたように、どのエスノ・リングスティック・グループに属する相手でもよい。恋愛結婚が多い。相手の人物の条件について、21才の大学を休学して家の手伝いをしているある女性に質問してみたところ、ハンサムであるかどうかは2の次で、respectable と helpful な人という答えがかえってきた。実は、これは、何人かの親に、子供の結婚の相手としてどういう人がいいかと質問したときに、返ってきた答えとも、まさしく、一致している。要するに、家族や親族、コミュニティの一員として、協力的に誠実にやってくれる人、という意味なのである。都会では多少事情がちがうと思われる。マニラのある女性週刊誌にいつも載る「男性の相手を求める」欄には、「安定した仕事」についている人、というのが実に多かった。農村の親は、現在では、子供がみつけた相手に対しては、たとえ、彼が貧困であっても、いやそれが普通なのだが、ほとんどの場合、心よく迎えているようであった。

さて、結婚がきまったとなると、新夫婦は親からそれぞれ財産を分けてもらう。女の場合、特別に伝統的な嫁入り道具というのはないが、土地、カラバオ、現金などである。新夫のも合わせて、これが出発財産となる。花嫁衣裳、指輪、花嫁の靴などは、花婿の母親が用意する。

結婚式はすでにのべたように、キリスト教式で行なわれるが、内容的には土着的なものである。サンタ・バルバラの例でいうと、式の前夜には、コスチュームをつけてダンス・パーティーがひらかれる。食物・飲物は花嫁の家で用意するが、カピット・バハイの人々や招待された人々が金をつつんでも

ってくる。翌日の朝、教会で式が行なわれる。昼食は、花婿側で用意する。その席上、珍しい風習によって、新婚夫婦の生活資金が調達される。この席には、双方の親族が出席しているが、そのそれぞれから、丁度、セリのように、順々に、10ペソ、50ペソという単位で、花嫁、花婿のそれぞれに、競争して、金を出す。相手方が10ペソなら、こちらも10ペソ出さないと、ヒヤhiya（恥）となる。もっとも、極端な金額は出ないし、また、双方ともバランスがとれるよう、前もって打合わせがしてあるので、勝っても負けても大したことはない。だから、ほとんどセレモニー化しているようである。

新夫婦は、自分達の家があればそこに住むが、多くの場合、夫方か妻方かのどちらかの家に住む。妻方に住むケースもかなりあるようである。つまり夫方の家に住まねばならないというような、伝統的しきたりはない。同じように、結婚後の親籍つきあいにおいても、夫方、妻方とも対等である。本家分家の観念は、もちろんない。

離婚は、カソリックによって禁じられている。したがって、同じマレー系人種でも、離婚率がきわめて高いインドネシアやマレーシアのような回教国とくらべると、数字に出る離婚率はきわめて少い。ただし、別居は可能である。都市では、今日、事実上の離婚ともいうべき別居が、増えてきているという話を聞いたことがあるが、われわれが調査した農村では、ほとんど聞かれなかった。それだけ、離婚への誘因よりも、家族的結合や親族的結合を強固にすることに利益を感じる誘因の方が、農村共同体にあっては相対的に高いのであろう。

夫婦の一方が死亡した場合、1年間過ぎたのちであるなら、再婚は自由である。

さて、結婚によって新夫婦が誕生するにいたったいきさつからわかることは、決して、新夫婦が元の家族や親族から完全に独立して、新家族を構成するという観念からは程遠いということである。夫方、妻方それぞれとの親籍



づき合いは、依然として強固である。というよりも、血縁集団としての親族、それも、夫方、妻方それぞれの2つの親族集団の合体したもののなかにあつて、新世帯がその枠内の1部分を構成するといった方が適切である。

われわれがみた家族とその中の個人との関係は、家族という相互扶助集団の中の個人という姿であった。それと同じことが、双系の家族が重層した大親族集団と、その中の1家族(世帯)という関係だといってよいだろう。

われわれが宿泊した民家には、ヴィクトリア地区からだけでなく、マニラやその他の地域から、次から次へと親籍の人達がやってきて、食事をともにしたり、宿泊したりしていくことがしばしばあった。すでに、いくつかの例でもふれたように、何かの行事にかこつけて、親籍同志は、食事・宿泊を共にする習慣があるわけである。

日常の悩み事、生活上の困難が生じたときに、相談をする相手は、第1に家族であるが、第2は親籍である。生活上の悩み事や困難といえは、貧困な農村のことであるから、食糧の確保や、仕事の確保の問題である。そうした問題は、親籍同志で扶け合う。それ以外のこまごまとした事についても相談と扶け合いがなされる。子供が都会に出て、勉強したり、就職を求めたりする場合、すでに都会に出ているところの家族・親族が扶ける。

バリオ・サン・ハシントでは、すでにのべたが、バリオ民の多くは、創設期において功労のあった5人の人物の子孫からなりたっている。サン・ハシントにかぎらず、周辺部バリオの多くは、多かれ少かれ、同一方言出身を大多数とする親族集団の色彩が濃い。職業も農業が多い。中心部バリオが、タガログをはじめとするいくつかの言語族の混合度も高ければ、職業分化も進んでいて、親族集団としての色彩が薄いのは、対照的である。このように周辺部バリオほど、その共同体は、創設期からの子孫による血縁共同体という性格を濃厚にもっているといえる。

#### 擬似血縁関係

これは、ある人が、他の家族と共に住んでいるとか、その家族と特別に親しい関係にあって、あたかも、その家族の一員、もしくは、血縁関係にあるかのように処遇されるような関係をいう。例えていえば、その家を訪問するのに挨拶ぬきで行けるとか、自由に出入りし、食事をしたり、泊っていたりする間柄である。つまり、直接的な血縁関係ではなくとも、血盟的な義理人情関係にあるような場合である。これは、いったん、共通の立場、あるいは盟約、たとえば、同一の企業や同一の学校に所属するようなことにでもなれば、農村的な家族・親族、つまり、キンシップの延長ともいうべき、特別な熱かさ *warmth* で人間関係が運ばれるという慣習からくるものであって、フィリピン人共通の性格にまで拡大されている。マニラで、女同志あるいは男女間とはちがって、驚くなかれ、若い男同志が、手を組んで街頭を歩くという風景がみられるのも、こうした人間関係のあらわれであろう。

彼等は、社会的便宜を求めるために、この関係を積極的に利用し、いわゆるコネの網の目を広げることに関心をもつ。西欧近代の原理では、「個人は何かできるか」という問題のたて方になるが、ここでは、「個人は誰を知っているか」ということになる。

コンパドレ *compadre* も、こうした擬似血縁関係から生じたものの1つであろう。これは、名付け親 (*godfather*) のことであるが、スペインによってフィリピン社会にもちこまれたとき、それは洗礼親という宗教的役割を果たす人から、フィリピン独特の人間関係にあって社会的便宜のような恩義を与える人のこと (*patronage spoils*) に意味がえされてきた。彼は、しばしば、都市に住む有力者であることも多く、就職、その他の社会的便宜を与えて、庇護的な役割を発揮する。

コンパドレにかぎらず、バリオ・フィエスタ、プラザ、ミュニシパリティなどの風習や制度は、その言葉とともにスペインがもちこんだものであるが、そうした輸入を可能ならしめたフィリピンの伝統的風土もまた存在していた

といわねばならない。ただし、農村では、コンパドレにかぎらず、サー sir とか、地位、身分で人を判断するとかのスペイン的観念は、都会に比べて弱く、むしろフィリピン人固有のものの残存が強く感じられる。女性の地位が高いこともその1つであろう。

それはともかく、こうした擬似的血縁関係にあっても、あの結婚式における親族同志が演じた珍しい風習、つまり、結婚資金をセリのようにして相互寄付をした際にみられた考え方と共通のものがみられる。すなわち、一方の恩義に他方が同等にお返ししてバランスさせるという観念である。もしも、コネによって面倒をみてやり、それによって、何がしかの恩義を与えたら、恩義を受けた側はそれに応じて、何らかの代償を払わねばならない。恩義を受けて負債を負うことをウタン・ナ・ロープ utang-na-loob といい、それにお返しができなければ前にのべたヒヤ hiya (恥) となる。それをお返しすることによって、他人との関係が、あたかも血縁関係のように、濃密で、熱っぽいものとなり、他人と相互対等にうまくやっていく身の処し方、いわゆる、パキキサマ pakikisama が可能となる。真正血縁関係にみられた、あの相互扶助・協力という、相互主義の原理は、このように、擬似血縁関係においても同様にみられるのである。

ところで、バリオ内にあっても、バリオ外にあっても、こうした真正血縁的・擬似血縁的關係をたどっていけば、その網の目は広大なものになってしまう。従来は、それが、同一方言のグループとして、社会的に大きな機能を発揮することにもなっていたが、方言間の排他性が、この中部ルソンにみられるように、農村バリオからくずれてきているとなると、実際の社会生活上、必要で、かつ有効に機能している人間関係としてのそれらグループの範囲は、ある程度、限定してこざるをえない。つまり、バリオに住む人間にとっては、日頃、顔をよくつき合わせて、日常的につき合える間柄のそれにならざるをえない。スペインがもちこんだ、ハイ・ソサイアティの原理であるいくつか

の観念も、バリオでは薄くならざるをえない所以がこれである。というのはバリオはまた、地縁的共同体でもあり、そこにこそ、彼らの日常の生活の核があるからである。バリオ・カリブングンのカピタンの話では、マニラに自分たちのコンパドレがいることはいるが、めったに行くことはないし、困ったことは、彼の所にもちこむよりも身近な家族で何とか相談して解決しているということであった。

### 地縁的關係

地縁關係の最小の単位は、いままでにたびたび出てきたカピット・バハイ magkapit-bahay (隣近所) といわれるものである。これは、自分の家を中心として、「石を投げたらとどく距離」に住んでいる人々の間の關係をさしている。普通は、せまい小路およびクリーク沿いに点在していて、行ったり来たりに近い間柄にあるため、日常生活における最も頻繁な共同性がみられる場所である。

カピット・バハイの人々は、必ずしも、親籍同志でないこともある。だが、親籍關係以上に、日常の交際が多い。誕生、成人、結婚、死亡という通過儀礼には、お互いに招じ合い、手伝い合う。田植えや収穫時には、日本のように短期間に集中して作業を行なわねばならないような気候条件にはないので、多数の労働力を一時に集中して必要とする度合は少ないが、それでも、カピット・バハイ同志で農耕の手伝いをする慣習が残っている。

共同労働は、IVでふれたように、有償と無償とがある。土地なき農民の比重が高いこの地域では、自分の生活を支えるために、有償で他人のための労働をすることが一般的な形であろうが、問題は、こうした日雇いの賃労働を雇う場合でも、それが近代的な雇傭契約の原理や観念によって行なわれるのではなく、土地を占有する側、つまり、地主、自作人、小作人は土地をもたぬ人に恩恵を与え、土地をもたぬ人はそれに報いるという、一種の庇護・協力といった人間關係の温かさにもとづく相互扶助原理によって行なわれるの

である。だから、わずかの土地を耕す小作人が、自分の家族の労働力に依存することをせずに、土地なきカピット・バハイの人を何人か雇って、耕作するという、一見、奇妙な状況もあらわれる。

カピット・バハイの人々によるこれと同じ原理や観念は、拾い上げていくときりがないほど生活のいろいろな面にいきわたっている。その1例としてこんなことがあった。収穫後、乱雑な稲こきをしている少年がいたので、案内してくれた人に、「こぼれる粃がもったいないですね」といったところ、その案内者がいうには、「誰かが拾いますよ」とあっさりしたものであった。誰かとは、近所の土地なき農民の家族にちがいがなかった。生産性を上げて50対50といった比率で小作料を払わねばならなかったバリオの農民達が、バリオ、あるいは、カピット・バハイに乱雑な作業のおかげで確保される分をちゃんと計算し、残りの収穫から50%を地主に差し出すという、実に合理的な長年にわたる知恵のたまものであった。バリオ、あるいは、カピット・バハイに確保される分の配分は、たとえ、耕作する土地をもとうが、もつまいが、助け合いによって、均等化がはかられていくということになる。

カピット・バハイよりも、大きく、約20軒ぐらいのまとまりをもった単位をプロク *purok* という。プロクも、一本の道路か、クリーク、あるいはダナウ *danaw* (沼もしくは池) 沿いにある。それは、ある1軒の家族を中心としてみた単位であるところのカピット・バハイが、そのまま大きくなったものであるから、相互扶助・協力の慣習もまた、まったく同じものだといえる。

道路やクリークやダナウは、プロクの人々の共同利用の対象である。クリークやダナウは、水浴、小魚とり、カラバウの水浴などの用に供せられるが、機械設備などの不備から、灌漑の用にはほとんど供せられていない。

くりかえしになるが、バリオの運営は、1人のカピタンと6人のカウンスルマンを中心に行なわれている。多くの場合、各プロクからほぼ1人の割でバリオ・カウンスルマンが選出されている。彼は、バリオ全体の運営で、バ

リオ・カピタンを補佐するだけでなく、自分のプロクの人々のよき相談相手である。カピタンは、15才以上による投票で選ばれる。戒厳令以前に、ナショナルなレベルで行なわれていた選挙の際の投票資格は、21才以上であった。農村バリオは、現在、公選制と自治とが残っている唯一の場所であり、しかも、投票資格が15才以上という具合に、かなり低く引かれていることも考えあわせると、農村バリオにおける自治的共同体としての伝統がいかに根深く、自然的で、貴重なもので、戒厳令のような集権化された体制下でも、容易にこれを動かしがたいものであるかがよくわかる。

バリオは、行政村であることはもちろんであるが、自然村としての色彩も濃厚に残している。それは、バリオが創られている自然的条件からみても、感じられることである。とくに、周辺部バリオがそうであるが、共通の地理的環境をもっている。それは、広い中部ルソンの平野の中の、所々に浮かぶ島影のように、森林、小高い丘、沼や川のふちといった共通の外観をもって点在している。それはまた、この地に住みついた時以来の、自然の災害に対する共通の運命を分かち合った運命共同体のような趣きすら感じられる。

運命共同体といえ、彼等の祖先が今のマレーシア、インドネシア方面から、バランガイという50人乗りぐらいの舟にのって、フィリピンの各地に渡来し、住みつくようになったときは、まさしく、運命共同体であっただろう。同一の舟に乗っていたのは、親族か、あるいは氏族であっただろうか？

フィリピンに住みついた以降、彼らは、より拡大した規模の部族、あるいは言語族を構成した。当時は、どういう組織形態で、どのような土地所有関係をもち、どのような社会運営を行なっていたであろうか？ その時の共同体は？

そこにスペインの支配とキリスト教が入ってきた。と同時に、フィリピン人は、最初の定住地から、スペインがもちこんだエンコミエンダのような土地制度とともに、新たな定住地をめざして移動をはじめた。こうして出来た

ものの1つが、現在の中部ルソンの農村バリオである。だとすれば、彼等が、古来からもっていた共同体とその意識型態が、スペインの下でどのように変型がなされたのか？そして、現在まで、それがどう変りつつあるのか？

以上はすべて、私にとっては、今後、解き明かすべき謎である。スペイン統治以降、および、現在については、多少とも、文献的資料や、こうした実態調査によって、手がかりはつかめる。しかし、その意味づけ、根拠づけはやはり、歴史をずっとさかのぼらざるをえない。となると、かなり困難な課題でもある。

私が、このノート風の小論で紹介したかぎりでも、このフィリピンのバリオ共同体の性格は、ヨーロッパや日本におけるそれのような、すでによく知られ、しかも理論づけが行なわれているものとはかなりちがったものである。第一に、現在では、耕作地、牧草地、森林といった基本的な土地についての共同占有が存在しない。だから、基本的土地の共同占有を物質的基礎として共同体が成り立つとする古典理論では、うまく説明がつかない。しからば、物質的基礎をもたないところの意識の面だけの遺制と考えても、あまりにも共同体が現実的力をもっている実情にそぐわない。少なくとも、バリオの共同性の実体としては、バリオの教会、プラザ、道路、湖川の共同管理があり、バリオ祭りをはじめとする様々な慣行がある。ではどうして、その共同性が必要となる根拠があったか、となると、やはり、バリオ創設期における事情が決定的といえる。したがって、ヨーロッパや日本の共同体やそれに関する理論をもとにして、どこまで同じであるか、どこがちがうかという議論は、あまり有効なものとは思われない。というのは、おそらく、まったく、歴史的・風土的根拠を異にするからである。

このヴィクトリア地区のバリオの共同体としての性格づけ、および、その根拠づけの作業は、こうした実態調査を手がかりにしながら、おそらくは、少なくとも、100年前後の歴史をさかのぼって、現在地におけるバリオの創設

期とその後の変化を綿密に検討することが、1つのポイントとなるだろう。ついで、歴史を逆にたぐっていった、フィリピンへの渡来時期、さらにそれ以前へと、検討が進められることになるだろう。

## VII 生活目標と生きがい

われわれが、もっとも頻繁に質問し、サンプリングをしたのは、バリオ・カピタンもしくはカウンシルマンであった。

彼等の職業は、ほぼ、水田、砂糖きび畑とも、それぞれ、1ヘクタールから4〜5ヘクタールぐらいを耕作して生計をたてている農民が多かった。若干の例外は、自動車修理業、労働者、土地の管理人、貨客輸送業などの職業の人達であった。階層からすれば、土地なき農民を底辺とすれば、やや裕福とでもいえる程度である。というのは、彼らが耕作する水田、砂糖きび畑には、必ずしも自分の所有地だけでなく、人によっては、小作地、借地も含まれているからである。小作地では50%の小作料を、借地では25%の借地料を払わねばならない。なかには、わずか、1ヘクタールの水田しか耕やしていない小作人のカピタンもいた。

そうした彼等に、生活目標や生きがい、あるいは、もっとも幸福に感ずる時などについて質問してみた。

生活がもう少し安定したいとか、美味しいものがたべたいとかの一般的な答えのほかに、めだったこととしては、健康で、毎日、仕事ができること、夫婦仲良く、うまく暮らすこと、外へ働きに出ている子供が家に帰ったときが1番幸福に感ずること、等があった。つまり、関心といえば、かなり、自分の家族の安定ということに集中していると思われた。

子供にたいする躰としては、そのことに関連していることが多い。例えば仕事に勤勉な人になれ、盗んだり、ギャンブルをやったりする悪い仲間に入るな、女とうまくやれ、つまり、結婚したらけんかをするな、隣人を愛せよ、



信仰心をもて……等である。

逆に子供の方に質問した時に、帰ってきた答といえは、親の意見に対応してかなり共通のものも多いが、多少、社会的なひろがりをもっている面も感じられた。たとえば、すでにふれた高校生へのアンケートの中では、収入が多い職業について、親をたすけたい、協力的で責任感のある、家族に役にたつ人になりたい、という答えのほかに、コミュニティの貧困をなくすために努力したい、という意見もあった。

ところで、生活の目標、安定ということに関連して、子供の教育にたいする熱心さには目を見張らせるものがある。それは、高等教育にたいする就学率の高さに非常に良くあらわれている。

質問をした27人のカピタンやカウンスルマン自体の学歴についてみると、次のとおりである。小学校4年までが8人、6年までが9人、高校が8人、大学が2人である。この数字には、それぞれ、中退も卒業も含まれている。

しかし、この親の世代に比べると、子供の世代は、ずっと、高学歴になってくる。上記27人のカピタンやカウンスルマンの子供達について調べたところ、次のような結果が出ている。合計144人中、大学（専門学校を含む）に進んだものは、在学中、中退、卒業を合わせて、46人、高校に進んだものは同じく、54人であった。大学進学者がなんと、3分の1近くあるわけである。高校進学者数は、現在、小学校に在学中の者が行くはずになっているから、さらに増えるのは確実である。

バラヤンというバリオのある娘さんに聞いたところ、小学校時のクラスメート60人中、高校へは3分の2の40人ぐらい、大学へは3分の1の20人ぐらいが進学したという。この数字は、ヴィクトリア全体に一般化しても、そう大きな偏差はなさそうである。このバラヤンでは、大学進学者は男より女の方が多い。その理由は、性別よりは、両親を扶けることのできる子供を大学へやるからである。女子の場合、比較的に卒業後の就職事情がよい看護婦養成

大学への進学と、教師になることのできる大学へ進学するのが圧倒的に多い。

子供がどういう職業に就きたがっているのかについては、既にふれたヴィクトリア高校の生徒へのアンケートの結果を紹介しておこう。

まず、高校1年のあるクラスの男子24名中、ほとんどが、何らかの技術を身につけた職業につきたいと答えている。例えば、技師（4名）、軍人（5名）、芸術家（2名）、医者（2名）、その他、弁護士、ジャーナリスト、警察等々（各1名）である。奇妙というか、当然というべきか、親が農業をやっている子供7名のうち、たった1名だけが農業をやりたいと答えたにすぎない。

ところが、引きつづく質問は、現実の条件を考慮したら、何にしかねれそうもないか、であった。これに対する答えは、親が農業をやっている子供7名中、6名が農業と答えたのをはじめ、かなり、当初の目標より控え目な回答があった。どんな職業でもよい、家族のたすけになるものであれば、と答えたものや、答えなし、もあった。

つぎに、同じく、高校1年の同クラスの女子32名中、これも、ほとんどが一定の技術を身につけた職業を希望した。例えば、看護婦（5名）、教師（17名）、エアー・ホステス（2名）、医者（2名）、その他、秘書、ドレスメーカー、技師、弁護士等々（各1名）である。親が農業をやっている子供17名のすべては、教師か看護か医者を希望している。現実の条件を考慮した場合の答えでは、貧乏だからなれない、とか、主婦になるよりほかはないとか、両親のたすけになるものなら何でも、とかの答えが目立った。

4年生になると、多少ともちがいが出てくる。というのは社会的自覚が答えのなかににじみ出てくる。どういうタイプの人間になりたいかの質問にたいして、コミュニティの問題を解決していく人間とか、弟妹の教育をたすける人間になりたいとか、貧しい人に必要な人間になりたいとか、国家の発展を自覚した人間になりたいとかの意見が、1年生よりもはるかに多くなっている。どういう職業につきたいか、現実の条件によって、何にしかねれない

か、の質問にたいする答えは、1年生と大同小異であった。

このアンケートに答えた高校生達の家庭は、本人達も自覚していたが、大方は、バリオの中にあっては、最下層ではなく、中間層である。しかし、欧米や日本の中間層とは比べものにならないくらい、貧困であることはもちろんである。その条件を押し切ってまで、彼等自身も親も、大学の課程にまで進学することを望むし、無理して、実際に、進学させるのである。

その結果、旧世代については、小学校4年までしかいけない人が多くいたように、今の子供達の世代についても、高校や大学に、中途までいって、休学か、退学のはめになるケースがかなり多い。コンパドレや親籍の援助をあてにしても、限度があるにきまっているし、家が農家の場合、洪水や不作にでもなったら、たちどころに、学資がストップする。

にもかかわらず、教育への関心がこのように高いのは、それが、安定した収入への近道だと考えるせいであろう。大学卒業生の就職の道が限られていても、就職の機会が都会で勉強することによって多くなると考えるようである。同様の理由から、一般的には、親も子も、子供が外国へいくことを熱心に望む。外国へ行きたいという理由からだけのハイジャックもあったくらいである。それは、日本の若者のように、未知のものを求める冒険心からではなく、きわめて、ささやかな、しかし、彼らにとっては決定的な就業の機会への期待からである。そういえば、娘が看護婦となって、アメリカの病院で働いているというあるバリオ・カピタンの、その娘を語るときの実に満足そうな笑顔が印象的であった。

## む す び

ここに、書きしるしたことは、はじめにお断りしたように、われわれの調査のほんの1部分でしかない。しかも、われわれの調査それ自体が、現実のわずかな断片でしかない。

同時にまた、調査地点は、開発の進展とともに、もっとも影響を受けやすい近郊農村であることからすれば、時間の経過とともに、共同体の意識や慣行もつぎつぎと変化しているであろう。この点で、以上のべてきたことは、あまりにも、1974年夏という時点での、ごくささいな断面図でしかない。

本文中で、過去の、とくに創設期における共同体の性格を検討する必要を力説したわけであるが、その後、今日までの変化、そして、将来へむけての展望についても、まだまだ、やるべき仕事は多い。

さて、その将来へむけての展望に関連して、いいかえれば、私が、フィリピンの村落共同体の問題にとりくんだ動機にも関連しているのだが、最後に、ナショナル・インテグレーションや発展にさいしての村落共同体の果す役割について、現時点で気づくかぎりでの簡単な論評をしておくことで、本稿のむすびにかえたいと思う。

農地改革は、いうまでもなく、マルコス政権による「新しい社会」建設の1つの重要な柱である。当初は、土地の最高保有限度を49ヘクタールとしていたが、ついで、24ヘクタール、そして、最近では7ヘクタールへと、次第に下げられてきた。しかも、バランガイ・ミーティングの組織化などの諸政策とも合わせ考えると、「新しい社会」への意気どみは、かなり積極的、かつ、意欲的であり、それなりの成果も上がっているといえる。

しかしながら、本文中でしばしば指摘したとおり、そうした国家による農村問題の解決や統合への努力も、いぜんとして、根本的なところで、農民の意識との間にすれちがいや、ギャップを残していることは否定できない。

1つの、しかも、根本的な問題としては、農地改革が米作地にかぎられていて、さとうきび畑は除外されていること、および、米作地についてみても、地主からただちに土地を買いとることができずに、収穫の25%を払う借地人(lease holder)となっているケースが多いこと、さらに、政府の標準耕作規模は、3ヘクタールの自作農であるが、これとて、一年間、家族を養ってい

く収入を保障できないこと、等々である。

バリオが、行政村として統合されつつある割には、カピタンもカウンスルマンも無給であり、バリオ全体に対する政府の補助金も少い。あるバリオでは、過去、2件の補助しかもらえず、それも、1件につき、たった2,000ペソ(約8万円)であったと歎いていた。

もう1つの根本的問題は、なんといっても生産性が低いということである。本文中で、すでに、数字を示したので、再びとり上げることはしないが、それを解決するのに、新品種や化学肥料を使うところの政府の奨励するグリーン・レボリューションでは、農民の納得のいく同意がえられない。コストが高いものにつくからである。むしろ、われわれが観察したところでは、地道な、風土に合った品種改良と、そして、特に強調したいのは、灌漑の完備である。これは、焦眉の急を要する。

灌漑事業は、大規模な物的・人的動員力を必要とする。それは、古代アジアの専制国家以来、たしかに、国家が行なう事業かもしれない。しかし、農民たちが、神エホバにおすがりするように、それを国家に一方的におすがりするだけでは、仮に実現したとしても、主体的エネルギーは残らない。本文中でしばしばふれた農民の相互扶助や協力のエネルギーは、彼らのもつ伝統的知恵とともに、灌漑問題についても、農民の側からの主体的エネルギーとして発揮されてしかるべき問題である。

農地改革によって、3ヘクタールやそこらの自作農をつくり出すという発想は、ヨーロッパの共同体が私的所有の進展とともに崩壊し、そのなかから自由で進取の気質に富んだ独立自営農民が抽出されるというパターンを人為的に追いかけたものと考えれぬでもない。ヨーロッパでは、そのようにして抽出された個人が、自立した主体として、レッセフェールにのっとり、生産活動に従事することによって、社会の発展が保証されたわけであるが、アジア社会では、人為的にしろ、ともかくも抽出される個人は、それだけでは自

立しえず、したがって、何らかの、集団的な再組織を必要とする。灌漑が集団的力を必要とするという風土的条件も大きく作用しているであろうし、また、バリオにみたように、血縁的・地縁的相互依存関係が強く作用しているという伝統もある。

問題は、現存の共同体にみられる排他性、閉鎖性、停滞性といったマイナス要因をどう克服していくか、逆にその際、相互扶助やバヤニハンの慣習にみられるプラス要因をどうのばしていくかということであろう。

ここ中部ルソンは、農村問題の革命的変革を主張して活躍したかつてのフクバラハップや、新しいところでは新人民軍の主舞台である。農民による小作争議などの例もマルコスによる戒厳令や農地改革以前には、厩大な件数にのぼったほどであった。

そのようなエネルギーを秘めている地帯であれば、なおのこと、そのエネルギーを地道な生産や流通（そういえば、農業協同組合の組織化は、他の東南アジア諸国に比べてすすんでいない）の面での共同体の伝統を生かしたコミュニティづくりに向けられぬはずはないと考えられる。そうなると、その共同体は、もはや、現存のバリオの枠内に止まらず、地域的にみても、構成員からみても、新しい形になっていかざるをえないだろう。しかし、そうした、集団的力としての共同体の再生こそが、何よりも農民の伝統的慣習や意識の延長線上での再生であるため、内発的エネルギーにもとづく社会の発展の道をより良く保証するものとなるであろう。